

三浦国雄著 『朱子集』

石田, 和夫
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18047>

出版情報：中国哲学論集. 3, pp.63-67, 1977-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：



三浦国雄著『朱子集』

石田和夫

本書は朱子語類百四十巻の抄訳及びその注釈である。朱子学関係の書物の中で最も難解な部類に属し、それだけに貴重な資料の宝庫であるともされる朱子語類のこういう形で、積注書の出版は、筆者が知り得るかぎりでは初めての試みである。その意味で、近年やっと躍進しつつある朱子語類研究の成果の第一弾がここに結集されているということが出来る。本書を紹介するにあたり、宋学に関心を持つ筆者に、本書が多く有益な助言を与えてくれたことを先づ最初に明記して、以下、本書の内容・特徴の紹介及び若干の感想を述べてみたい。

先づ本書の構成は、第一章・門生たちへ、第二章・聖人学んで至るべし、第三章・新しい古典学、第四章・世界の構造、第五章・人間の疑視、第六章・異学批判、第七章・歴史と文学の七章からなる。総数一万条にも達すると思われる朱子語類の中から、従来の分類方法を踏襲しながらも著者独自の見解によって朱子語類が再構成され、第一章から第七章までそれぞれが関連を損うことなく、朱子学あるいは朱子の人となり幅広く捉えられている。この構成とそれに連なる資料選択に際しての苦心は、「あとがき」に伝える所であるが、著者が「朱子語類および朱子学の全容はほぼ尽くし得たと信じる」と自負するに足るすぐれた再構成がなされていることは一見して窺い得る所である。それではその各章ごとの内容を、著者の言葉を借りつつ簡単に紹介してみよう。

第一章、朱子が門人に与えた訓戒と語録を集めており、朱子語類では主に巻一―三―一―二―にまとめられているもの。朱子の人となり、師と弟子のありようを生き生きと伝えた部分。いわば朱子学入門、全体の導入部とでもいうべきもの一四条を収める。

第二章、学んで聖人に至ることを目指す宋学、特に朱子学の思想体系は、万人にひとしく内在する天理としての性をその根本に置く。朱子学に於ては、人間はこの性というレベルで水平化され、聖人への道が約束されることになる。この本来の性の輝きを十全に發揮させるための修養が工夫と呼ばれるものであり、朱子学に於けるその具体的な方法

が「居敬」（心身を集中専一の状態に保って涵養する）と「窮理」（事物の理の探究）であった。本章はこの朱子の居敬・窮理の工夫を通して聖人となるべき道をさぐる実践工夫論二五条を収める。

第三章、徹頭徹尾聖賢の租述者であろうとした朱子は、殆どすべての經典に対して注釈を書き、また書こうとした。「四書集注」をはじめとするその業績は後漢の鄭玄に比せられるほどのものであった。本章は、朱子の諸注釈書の中から特に四書及び易のそれを中心として展開された思想を伝える部分二三条を収める。

第四章、程伊川の理、張横渠の気を介して、朱子は理と氣とを緊密に結合させ、その組み合わせのバリエーションによって天地宇宙と全ての存在物と見えざる鬼神の世界までを一貫して説明しうる体系を構築した。本章は、主として世界及び鬼神の構造について説明した朱子学の基礎理論について一五条を収める。理・氣の説明はすこぶる明快である。

第五章、前章に説明された宇宙の基礎概念としての理氣は、同時に存在とその内なるメカニズム・心のはたらきを規定する概念としても機能する。朱子学の「性即理」という金科玉条は、このような複雑な理氣の関係を人間の性情へ展開して確立したテーゼであり、その意味する所は、性の己発としての情や氣の混入した氣質の性は排除されなければならぬという点も含むものであった。本章は、朱子の性情論・仁説等を理氣論と並行して取り上げており、朱子学の本体論とでもいべきもの一三条を収める。

第六章、朱子にとって最大にして最強の敵は仏教、とりわけ動的立場における揺るがぬ主体の確立を目指す新しい旋風を起こし、多くの士大夫を吸引しつつあった大慧宗杲であった。本章は、この大慧を中心とした仏教批判及び「心即理」を主張し、朱子と対立した江西の陸学、さらに道家に対する批判を、朱子語類卷一二四―一二六から一四條収める。いわば異端批判によって定論確立を図った朱子の軌跡をたどった部分である。

第七章、朱子は独自の歴史哲学を持っていたように思われ、個々の歴史事件についても豊富な発言を残している。また文学についても、文学理論と呼びうるほどの周到な体系は成し遂げられてはいないものの、氣・情の原理によって表現を捉える大胆な文学観を持っており、歴史・文学両面にわたって鋭い人間観察を行っている。本書は従来あまり顧みられなかった朱子の歴史と文学についての発言一四條を収める。

各章ごとに十分吟味された資料が取り上げられ、原文の他に書き下し文と訳が別々に付けられ、その後解説が加えられている。解説の中では、幅広い典拠調査と本文校訂が行なわれており、なかでも当時の俗語表現に於る語句の説明並びに語法の整理は注目に値するものがある。そもそも朱子語類を読むに際しての最大の障害の一つは、俗語表現が多出する点に存するといえるが、著者は豊富な文献の渉獵により、禅の語録から元曲に到るまでの知識を自在に駆使し、丁寧な解説を加えており、真に有益な示唆に富んでいる。

さらに内容的に見てみよう。著者は先づ朱子語類の持つ魅力を次のように分析する。「朱子語類が筆記者の早とちりや誤写等による師説の歪曲を相殺してもなお意味をもつのはまさにこの点、問いがなければついに引き出しえなかつた思想家の肉声を伝えているところにある」(五P)と。すなわち、学問体系として整理された主張を持つ四書集注等の朱子の著作に対し、朱子語類の持つ魅力は朱子自身の生きた思想を伝える点にあると。この点を十分に認識することによって、朱子学とは非人情で人間性に乏しいリゴリズムであるという従来の頭ごなしの先入視を打破することも可能となるのであるが、著者は最大限にこの朱子語類の特徴を引き出すことに成功しているといえる。例えば、第一章に於て取りあげた、弟子を前にして諄々として訓戒を垂れる場面、あるいは弟子に対して我を忘れて発せられた厳しい叱責の言葉、さらには持病の腰痛に学問修養をたどって弟子に諭す場面等、人間朱子を巧みに表現した部分が十分に盛り込まれている。しかも第七章に於ては、従来あまり取りあげられなかった朱子の詩人・文明批評家としての側面も十分に伝えており、その意味では朱子という生身の人間の全体像への接近を可能なものとしているということができよう。

以上のように著者は、朱子語類の持つ特徴を十分に生かしながら朱子学への接近を図っているのであるが、この朱子語類の持つ特徴こそは、実にその危険性と表裏の関係にあるともいえるのである。すなわち、他ならぬ「朱子の肉声」は、それが弟子の質問に対し、その場に於て発せられたものであるが故に、精密機械のごとく組織された朱子の思想体系の冰山の一角のみを示す恐れなしとしないのである。それゆえ、重要な部分の読解は、常に朱子学の学問体系を念頭に置きつつ原文を読み進めてゆくという作業を怠ってはならないものである。著者がこの作業を怠っているというつもりは毛頭ない。むしろ、それぞれの資料について確実に典拠を踏まえ、「朱子文集」・「四書集注」

等からの関連資料、加えて北宋の、朱子に先立つ思想家からの参考資料の引用は、まことに的確で申し分のない説明が加えられている所であるが、この点に注意してみるとやはり幾分かの不明瞭な部分が存するといわざるを得ない。

今ここにその一つの例を挙げてみよう。第三章・新しい古典学に於て取りあげられた所当然・所以然の説明は、他の部分の明確な解説に比べると今一つ歯切れの悪さを感じさせる。しかも著者は「広曰く、大は陰陽造化に至るまで、皆是当に然るべき所にして已む容からざる者なりや。所謂太極は則ち是れ然る所以にして易う可からざる者なりやと。曰く固より是なり。云云」という文章に対して、「所以然としての理は言葉で云い表わせば太極とならざるを得ない」（一六〇P）との解釈を施す。原文に即した解釈としてはこう言わざるを得ないであろうし、わざわざここで問題にすることもないであろう。しかし、所以然の理は朱子学の根本に位置する重要概念であり、この理解が十全でなければ、とりもなおさず朱子学の理解を不十分なものにするということを考えるならば、看過することのできない問題が含まれているといわなければならない。朱子が論敵陸子との間に無極太極論争を行ったことは今さら言うまでもない。この論争に於て朱子は「無極を言わざれば則ち太極は一物に同じ、万化の根と為るに足らず。太極を言わざれば則ち無極は空寂に淪んで、万化の根と為る能わず」（朱子文集卷三六・答陸子美・本書二五七P参照）といい、自らの思想に於ける「無極」の重要性を強調したが、実は、この「太極」に付け加えられた「無極」の字こそが所以然・所当然の説明にも反映されなければならないものであった。つまり、所当然に対して、所以然の持つ最も明確な特殊性は、事物を超越した万化の主宰的性格を示す「無極」なる語に表現されるとい得るのである。ここでいう「所謂太極」が「無極」を踏まえた上での「太極」であると解釈すれば問題は残らないかもしれないが、いささか舌足らずの感を免れない。少くとも、陸子との無極太極論争を踏まえた説明が加えられたならば、所当然・所以然の意味する所はより明確になったであろうと思われる。

それにしても毫釐を誤まれば千里の謬を生じかねない朱子語類の難解な条文を前にしての著者の苦心は察するに余りあるものがある。ここで取りあげた問題点の他、部分的に疑問点が存しないわけではない。しかし全体を通して見た場合、それらの欠点をカバーして余りある長所を見出すことは容易である。素直に敬意を表する次第である。とりわけ俗語に関する整理と研究の成果は、これからの朱子語類研究に大きく寄与するであろうことは疑い得ない所である。

あろう。

昭和五十一年十二月 朝日新聞社発行
四百七十六頁 定価一五〇〇円

執筆者紹介

荒木見悟	九州大学文学部
吉田公平	東北大学教養部
竹内弘行	高野山大学文学部
荒木龍太郎	九州大学大学院
海老田輝巳	北九州工業高等専門学校
石田和夫	九州大学大学院